第0章

講義の計画と概要

0.1 講義計画

法経連携の講義を進めていくと、経済学に関する文献を読む機会がある。経済学の論文は、経済学の基礎的な知識は理解している読者に対して書かれたものである。法経連携のコースを履修している学生の多くは、法と経済学に関わる問題に関心があると思われる。法と経済学の理論的研究の多くはミクロ経済学を基礎とするものが多く*1、それら論文内では大学院(修士)で学ぶ内容を既知として扱われている。

しかし、法経連携のコースを履修している法学部生が、半年間のミクロ経済学の講義のみで、論文内において要求される水準の知識を身に着けることは極めて難しいだろう。そのため、この講義では、法に関わる経済学の文献を理解するために必要な知識のうち優先度の高いものの習得を目指す。別の表現をすると、2年次に経済学関連の文献を読む機会があることを考慮すれば、この講義の意味は「経済学の論文を解説された時に、少しでも意味が分かるようになる」ということである。

具体的な目標は以下の通りである。

- 基礎的な用語の意味が理解できるようになる。
- 最大化・最小化問題の視点から社会を眺める。
 - 価格理論:消費者・生産者行動のモデル化を理解する。
 - ゲーム理論:自分の行動が他人に影響する状況のモデル化を理解する。

これらの目標を達成するために、現時点では以下の講義計画を考えている。法に関わる問題をミクロ経済学の視点から考えるためには、自分でミクロ経済学的な問題を作ることが望ましい。自分で作成した問題を解くことができ、その結果が面白いということは稀だが、問題を作成すること自体が、ミクロ経済学的な視点を養うことに有用である。そのため、各回において課題や練習問題を設定した。課題を提出しなくても成績評価に影響しないが、講義に出席するのであれば、提出もしてほしい。練習問題は講義内容の復習的な位

 $^{^{*1}}$ データを扱った実証的研究では、計量経済学の手法を用いているが、この講義では理論的な問題を理解するための基礎を提供する。

置づけであるので,提出する必要はない。自分の理解を深めるために,復習の指標とすれば良いだろう。

- ・9月30日 ミクロ経済学のイメージと導入
 - 微分, 偏微分, 効用関数, 無差別曲線, 予算制約線, トレードオフ
 - 課題:法に関わる無差別曲線と予算制約線の図示
- ・10月3日消費者の効用最大化と需要曲線,弾力性の概念
 - 最適消費量, 価格消費曲線, 需要曲線, 価格弾力性, 所得弾力性
 - 練習問題:法に関わる問題の最適消費点の変化の図示
- ・10月10日 効用最大化問題の応用(労働の例と医療の例)
 - 課題:法に関わる効用最大化問題の作成(解かなくて良い)
- ・10月17日 生産者の利潤最大化と供給曲線
 - 費用, 平均費用, 限界費用, 固定費用, 最適生產量, 供給曲線
 - 課題:法律の変更と供給曲線の変化の図示
- ・10月24日 均衡と比較静学
 - 均衡,外的な環境の変化による均衡点の移動
 - 練習問題:法律が変更された場合の均衡点の変化の図示
- · 10 月 31 日 厚生分析
 - 消費者余剰, 生産者余剰, 社会厚生
 - 練習問題:法律の変更が消費者・生産者・社会に与える影響の分析
- ・11月7日 不確実性下での最大化問題
 - 期待効用,期待利潤
 - 課題:不確実性下での法に関わる効用最大化問題の作成(解かなくて良い)
- ・11月14日ゲームの定義
 - プレーヤー、戦略、利得、情報、行動のタイミング
 - 課題:課題:法に関わる問題のゲームの定義
- ・11月21日 ナッシュ均衡
 - 囚人のジレンマ, コーディネーションゲーム
 - 練習問題:法に関わる問題のナッシュ均衡の計算
- ・11 月 28 日 部分ゲーム完全均衡
 - バックワードインダクション
 - 練習問題:法に関わる問題の部分ゲーム完全均衡の計算
- ・12月5日 企業間の競争
 - クールノー競争,ベルトラン競争,シュタッケルベルグ競争,製品差別化,戦略代替,戦略補完
 - 練習問題:規制の変更と均衡価格の変化に関する計算
- ・12月12日ルール(法律など)の変更と企業・消費者行動の変化
 - 課題:講義で扱った内容から総合的に出題 (1)

0.2 講義の概要 3

- ・12月19日情報の非対称性
 - モラルハザード、アドバースセレクション、投資と担保の例
 - 課題:講義で扱った内容から総合的に出題 (2)
- . 1月9日 質疑とまとめ
 - ※ 講義の進捗状況により、相対的に優先度の低い内容を省略することがある。
 - ※ 課題の回収は、次の回の講義の開始時に行う。ただし、課題を提出しなくても 成績には影響しない。成績は期末試験のみで評価する。

0.2 講義の概要

ミクロ経済学の内容に入っていく前に、経済学の論文を読む人達が考えている「経済」の概要を見てみよう。大学院で経済学を学んでいる修士2年生の知っている経済は、およそ図1のようなものである。この講義を履修している法学部の学生と経済学の修士2年生との違いは、修士の学生はこの経済を数学的に記述できることであろう。つまり、消費者の嬉しさを表す効用関数や、企業の技術を表す費用関数などを用いて、この経済における価格などがどのように決定されているのかを数学的に分析できるのである。

図1 私的所有経済のイメージ

数学的な分析ができるのであれば、法制度の変更などによって価格や労働量などがどのように変化するのかを予測できる。つまり、既に知っている経済の数学的なモデルに対し

て, 法制の変更を表す内容を加え, 新たな数学的問題を解きなおすことで, その予測を可能にしているのである。

しかしながら、経済学を初めて学ぶ人が、このような数学的な分析をいきなり行うことは難しいだろう。通常、経済学を学ぶ際に、このような経済全体を学ぶのではなく、経済を様々なパーツに分けて学習する。以下では、各回の学習内容がこの経済のどの部分に対応しているか簡単に説明することで、講義の内容を少し離れた視点から見てみよう。

■効用最大化問題(9月30日~10月3日) 図1のDさんに注目してみよう。Dさんは、株式からの配当という不労所得があり、それを財の支出に使っている。このような関係を抜き出すと図2となる。

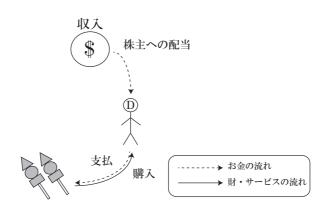


図 2 効用最大化問題

この図において、D さんは 1 種類の財のみを購入するような状況となっているが、最初に学ぶ効用最大化問題の多くは、2 種類の財を購入する問題を考えている。つまり、持っている予算を使って、どの財を何個買うのかとう問題である。

■労働供給問題(10月10日) D さんは労働を行っていなかったが,多くの人は労働から得た所得で財を購入する。そのため,人はどれくらい働くのかといった問題を考える必要がある。図 1 において,A さんや B さんは労働を行う対価として給料を得ており,それを使って財の購入を行っている。ここでは,B さんを取り出すと,図 3 となる。

このような労働供給問題を考える場合,B さんは2種類以上の財を購入しても分析は可能であるが,簡単化のため,1種類の財のみを購入するという仮定を置く。この仮定により,財の購入問題が簡単になり,賃金や給料と労働供給量との関係をより分析しやすくなる。

■利潤最大化問題(10月17日) ここまでは、消費者の問題を考えてきたが、この回では企業の行動を分析する。消費者の場合と同様に、経済全体を考えるのではなく、企業と消費者との関係のみを取り出す。次の図4は小売業者を中心とし、その取引相手である製造業者と消費者であるBさんから作られる経済を考えている。

この経済では、小売業者は製造業者から財を投入物を購入し、それをつかっておでんを

0.2 講義の概要 5

図 3 労働供給問題

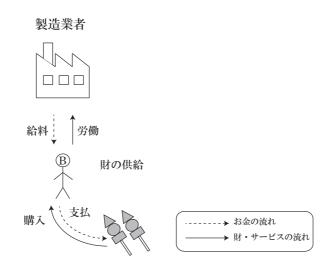
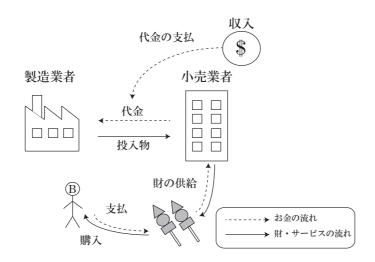


図 4 利潤最大化問題



作り、消費者である B さんに販売している。ここでは、小売業者は財の価格をいくらにするのかという問題を考えるのではなく、財の価格(相場)が市場で決まっている場合、どれくらい生産を行うのかという問題を考えている。このように、価格を変更できないものとして受け入れて行動する経済主体 *2 は価格受容者(プライステイカー)と呼ばれている。一方、価格を変更できると考えている状況の分析は、後半の戦略的相互依存関係(11月 14日 * 12月 12日)の部分で解説される。

■均衡分析(10月24日,10月31日) これまで考えてきた効用最大化問題と利潤最大化問題では、消費者や企業は価格を与えられたものとして考えられてきた。すると、市場でどのような価格が決まるのかは、分析されていないことになる。この回では、効用最大化問題と利潤最大化問題を合わせて考えて、市場でどのような価格が決まるのかを説明す

^{*2} 消費者,企業,政府などのことである。

る。考えている経済は、利潤最大化問題の場合と概ね同じであり、図 4 となる。また、市場で実現した価格が望ましいものであるのか評価するための手法も提供する。

- ■不確実性(11 月 7 日) この回以降は、最初の私的所有経済の図には描かれていない問題について考えていく。法に関する問題を扱う際に、不確実性の考えを避けることはできない。例えば、ある行動が訴訟になるかどうか不確実にしか分からない状況もあるだろうし、判決内容が有利なものであるかも確実には分からないだろう。そのため、この回では不確実性を伴う状況における消費者や企業の行動を再考する。基本的には効用最大化問題や利潤最大化問題に不確実性の問題を導入して考えることになる。
- ■戦略的相互依存関係(11 月 14 日~12 月 19 日) これまでの回では、(明示的には述べていないが)ある経済主体の行動が別の経済主体に影響を与えない状況を考えてきた。しかしながら、法に関わる多くの問題は、ある経済主体の行動は別の経済主体に影響を与える。例えば、訴訟において、どのような弁護をするのかは、相手の弁護士の主張などに影響を受けるだろう。このような状況を分析するためには、これまで学んだ手法だけでは不十分であり、ゲーム理論と呼ばれる手法を知る必要がある。この講義の後半は、このゲーム理論の知識の習得を目指している。具体的には、消費者間の行動や、企業間の競争などを分析する手法を解説する。最後に、情報の非対称性の問題を解説し、この講義を終える。

0.3 予習・復習のための資料

この講義は配布資料と板書によって講義が進む。そのため、予習や復習は配布資料や ノートに基づき行うことになる。しかしながら、この資料や講義での板書が必ずしも分か りやすいと思わないかもしれない。そこで、参考となる本を紹介しておく。

芦谷政浩『ミクロ経済学』2009 年, 有斐閣.

この講義では、この本に書かれている水準で、ミクロ経済学の概念を理解して欲しいと思っている。実際、この講義資料のいくつかの部分は、この本に基づいている。しかしながら、講義時間の制約により、この本のすべての内容を説明することはできない。それでも、予習や復習の際にこの本が有用であると考えている理由は、この本の索引が優れているからである。講義で説明した概念の理解が不十分であった場合、この本の索引から知りたい概念を調べ、該当箇所を読めば、新たな説明を見ることができるだろう。